

第十五話 「眠る間を惜しんで人類のために」

千円札の顔として現在日本中の国民に親しまれ、尊敬される世界の野口英世（一八七六一九二八）博士の人生には多くの先生や恩人が登場する。赤貧の農民の子から学者として国際的名声を博す生涯は、ただ幸運がもたらしたものではない。

英世は満一歳五ヶ月の時に囲炉裏に落ちて火傷を負い左手が不自由になつてしまつた。物心ついた清作（英世の幼名）は近所の子ども達に「手ん棒、テンボー」とからかわれて悔しい思いをしていたそうである。そんな英世が医者道の志すきつかけになつたのが、猪苗代高等小学校の首席訓導小林栄先生の尽力によつて受けた、左手の外科手術である。英世は高等小学校卒業後、若松市の会陽医院の渡部鼎先生を訪ね書生となり、ここで彼は三時間睡眠を実行し猛烈に勉強した。そして渡部先生の友人である血脇守之助の知遇を得て上京するが、上京を目前にし生家の柱に「志を得ざれば再び此の地を踏まず」と彫りつけた。その思いが東京へそしてアメリカへと彼を駆り立てる原動力になつたのである。彼の恩師のフレクスナー博士は研究所を訪れた日本人に「いったい日本人はいつ眠るのですか」という妙な質問をするくらい、彼の研究ぶりはすさまじかつたという。ニューヨークにある彼の墓碑銘には「その努力は科学に捧げ尽くされたり 人類の為に生れる彼は人類の為に死せり」と書かれている。

毎日眠る間も惜しんで勉強に励み、偉人として名を残した英世。彼の原動力となつたのは、自分を救つてくれた医学の道で社会に貢献しようという、恩にむくいようとする志だったのであろう。